

神話を語る

今、NHK教育テレビの「人間大学」で「現代人と日本神話」という話をしてる。なかなか視聴者も多いようで喜んでるが、このようにテレビで日本神話を語ることなど、私が日本神話を研究しようと思いついたころは、とうてい考えられぬことであった。私自身も敗戦のときには、軍閥が日本神話を利用してよからぬことをした、という思いが強く、日本の神話など二度と読みたくない、という気持ちであった。

ところが、スイスのユング研究所に行き、自分が分析を受けて、自分自身のことを掘り下げているうちに、どうしても日本の神話を問題にせざるを得なくなってきた。それでも昔の思い出があつて迷っているときに、日本の神々についての夢を見た。ユング研究所では分析家の資格を得るためには論文を書かなくてはならず、それには日本の神話を取りあげようかと思いつつ、前記のような抵抗感が強く困っていた。しかし、私の夢を聞いた分析家のC・A・マイヤー先生は、「自分の存在を掘り下げていくうちに自分の国の神話にぶち当たるのは、むしろ当然ではないか」と言われ、私もとうとう決心をした。

すると、先生は「そんなことならケレニイに会うといいだろう」と事もなげに言われ、私の目の前で電話をかけて交渉し、日時を決定して、ケレニイがチューリヒの中央図書館の読書室で本を読んでいるので、そこに会いに行くようにと言われた。これには私は驚いてしまって、ハイハイと言ったものの、どうなることか心配でならなかった。ケレニイ博士はハンガリー生まれの著名な神話学者で、マイヤー先生は友人だからいいものの、日本から出てきた若僧の私などに本気で会ってくれるだろうか、という思いがしたのである。

ともかく言われた日に中央図書館の読書室に行くと、その人のまわりに張りつめた空気が感じられるような端然とした白髪の老人がすぐ目について、その人がケレニイ博士だとすぐわかった。おずおずと自己紹介すると、ここでは話ができないので、とすぐに図書館の近くの喫茶店に行った。

「日本神話について何が書きたいのです」とケレニイ博士に尋ねられ、われながら不思議なことに「太陽の女神について」と答えてしまった。実はそれまでは、スサノヲについて書くつもりだったのである。ケレニイ博士に会って、スサノヲについて話すことをいろいろ考えていたのに、どうしたはずみか、アマテラスのことになってしまった。ケレニイ博士は非常に喜ばれて、「太陽は男性」とヨーロッパの文化では決めているようなところがあるが、そんな簡単なものではない、と話をはじめて、ギリシャ神話では太陽の女性的側面は、太陽神の娘たちとして描かれている、というようなことを話された。

そして最後に「あなたは詩をつくりますか」と言われる。突然のことにはげんな顔をしていると、「日本の神話を何度も何度も読みなさい。そんなに他の本を読む必要はありません。何度も神話を読んでいると、あなたの心に詩が生まれます。それをそのまま書けば、最高の論文になるはずですよ」と言われた。私はすっかり感激してしまって、「できる限り頑張ります」と言ってお別れした。

しかし、考えてみると「詩」は私の不得意中の不得意である。意気に感じて、「頑張ります」などと言ったものの、どうしようもない。そこでケレニイ博士の言葉を少し変えて、自分の心のなかに生まれてきた「物語」を語ることにしようと思った。硬い「論文」を書くのではなく、神話を物語るのだと考えると、あの程度はケレニイ先生の忠告を生かしたことになる。

そんなわけで、今はブラウン管を通じて、日本神話を語っているのだが、博士にお会いしてからすでに三十年の年月が経っているのである。